

## これまでの議論をふりかえって

外 山 徹\*

2003年から始まった「日本の地域博物館シンポジウム」も、2011年で9回目を数えることになった。近年では現職学芸員による現場の生の声を伝えることを主眼に企画が組まれることになり、対外的にもアピールされている。本稿では、今後、議論を深化させるための中間総括として、第5回以降を対象としてそこでの議論をまとめてみたい。

### 1 元職・現職学芸員による地域博物館論

はじめに第5～6・8回にかけての報告者と演題の一覧を掲げる。第5回の報告者は厳密には「元職」であり現場の声ということにはならないが、1960年代後半の地域博物館揺籃期に学芸員となり、70～80年代の発展期に現場を牽引した大先達の言葉として、以下の議論の中で言及することにしたい。

2007年度 第5回 感動し共鳴する地域と博物館

後 藤 和 民（元創価大学教授・千葉市立加曽利貝塚博物館）

「地域博物館と今後の夢—社会的役割とその機能—」

熊 野 正 也（元明治大学考古学博物館・市立市川考古博物館）

「葛飾区博考古学ボランティア その人たちと博物館教育活動」

2008年度 第6回 21世紀に入って、地元公共博物館学芸員の提示

多 田 文 夫（足立区立郷土博物館）

「区立博物館の住民団体と常設展示改修の事例から」

野 尻 かおる（荒川区立荒川ふるさと文化館）

「地域博物館学芸員の仕事—地域史研究と運営研究」

渡 邊 嘉 之（練馬区郷土資料室）

「地域博物館の展示と地域像」

滝 口 正 哉（千代田区立四番町歴史民俗資料館）

「文献資料の整理と研究活動」

武 田 庸 二 郎（世田谷区立郷土資料館）

「地域博物館が担う史料研究」

2010年度 第8回 地域博物館は地域にとってなぜ必要か

尾 崎 泰 弘（飯能市郷土館）

「地域博物館がより必要とされるためには—飯能市郷土館を例に—」

林 奈 都 子（浦安市郷土博物館）

「「おらんハマ」を再び！ ～海とのかかわりを取り戻すまちづくりをめざして～」

菱 山 栄 三 郎（福生市郷土資料室）

「地域博物館のあり方を考える—福生市郷土資料館の事例から—」

### 2. 地域博物館の設置をめぐる論争 —博物館はいらない？

さて、議論の振り返りを始めるにあたり、そもそもこのような議論が必要とされる所以について言及してみたい。現在、地方自治体の税収低下と赤字財政という厳しい情勢下に

\* 明治大学博物館学芸員

あって、特に公立博物館の占める割合の高い地域博物館では、人員・事業費ともに大幅な縮小がなされ、存廃さえ議論されるような状況がある。本来、博物館は、誰にも平等に開かれた教育機会という、市民の学が権利として保証されねばならない存在であるし、学齢期の児童・生徒に対する学校教育では得られない教育機会の場として注視されねばならない筈である。それが、博物館先進国における常識であるはずだが、我が国においては「一部の人たちの趣味のための施設」という認識が強いようである。多数を占める人々の博物館への無関心の下、公金の使途としてそれがふさわしいか、という議論がなされているのである。これは、博物館＝見世物小屋という発想がいまだ根強く、教育というものが国民にとっていかなるものであるか、根本的な理念がきちんと形成されていない証左でもある。

千葉県浦安市の博物館が建設計画途上にあった時、新たに選出された市長が建設をストップするという事態があり世間の耳目を集めた。同市は市民委員を公募して設置の可否を検討したが、反対論としては、税金使用の優先順位として福祉施設の建設が挙げられ、また、東京ディズニーランドの所在地、「ウォーター・フロント」としてイメージ付けられた新興ベッドタウンとして発展途上にあり、漁師町時代の記憶など必要ない、イメージダウンだ、過去のことは関係ない、今と未来が大事だ、という声が上がったという。こうした市民の“歴史ばなれ”の傾向は博物館の展示への無関心が顕著になりつつあるとして、尾崎報告（飯能市）でも指摘された。

### 3. 博物館の使命 1 ～文化財の継承装置

それでは、博物館は本当に一部の趣味の人々を満足させるためにすぎない施設なのだろうか？ 浦安市の事例では、マスコミの論調が期待する方向には行かず、幸いにも博物館建設は継続された。そして、現在、全国的

な注目を集める同館の博物館運営は折々触れる機会があるだろう。

博物館の役割として文化財を収容する施設であることは議論を待たない。しかし、何故、文化財は残されねばならないか、という点での理解・周知が足らなかったかもしれない。

「過去があつて現在があり未来がある」「先人たちは諸問題にどう処置してきたか？」という後藤の指摘は重い。「意味もなく現在があるわけではない」、また、「自分たちの世代の解釈で終わりではない」と後藤は主張した。熊野もまた「先祖が残してくれた遺跡をその責任において次の世代に残さなければならない」と言及した。すなわち、我々は、今現在のことだけ考えていてよいわけではない。そして、「過去からの流れの中で自分たちを捉えること」とする林報告にあった「未来の街づくりをやっているという意識」は、「今と未来」は過去があつて初めて成り立っていることを示唆しており、そのために博物館の存在は不可分であることを示している。

文化財＝実物資料があるということは、博物館を「現地に行つて実物を見て自分の実感で研究し学ぶ場所」「共有・活用の中」（後藤）となさしめている。各回のシンポジウムにおいては、博物館に陸続と保存を求める文化財が発生していることが伝えられた。多田報告（足立区）では住宅地の開発による家屋解体に伴って毎年数件の古文書・民具整理の必要な資料群が発生すること、滝口報告（千代田区）では展覧会準備に関わる関係者への聞き取り調査によって新資料が発見され続けていること、また、特別展「江戸町方与力の世界―原胤昭が語る幕末―」においては子孫への聞き取りと資料借用が実現し、関係者（他の町奉行所与力・同心、御家人の子孫）が来館するなど、もうすでに文化財は発見され尽くしてしまったのではないか、という理解を千代田区という場でひっくり返してみせた。武田報告（世田谷区）でも、特別展「漢詩人岡本黄

石の生涯」の開催によって生家宇津木家における資料伝来が判明し、整理作業が着手され、豪徳寺からは黄石正座像が寄贈されてそれにより第2・3弾の展覧会が実現し、また追加の新資料が寄託されるという、展覧会—資料収集—資料整理—資料研究が有機的に連鎖した博物館活動の展開が報告された。博物館は言うまでもなく地域の収蔵室としての役割が期待され、そこに収蔵されるものはまだまだこれから出てくるのである。

さらに、博物館は実物資料をしまっておくばかりではなく、「研究成果収納の場所」であり「地域史の記録・材料」を「次の世代の研究のために残してゆかねばならない」場所でもある（後藤）。また、モノばかりではなく古文書講座を通した市民との共同研究によって培われる古文書解読技術の伝達の装置でもあり、地域における資料情報の収集にも通ずるものであった（武田）。地域の歴史に関する「情報のストックができない」「知っている世代がいなくなると終わってしまう」という現状が指摘されたが、「情報をストックする場所が必要」（尾崎）な状況にあって、博物館こそそれを果たしうる場所なのである。

林報告では、この、文化財や情報を未来に伝える場の必要を痛切に感じさせる逸話が披露された。名古屋市博物館との漁具資料の合同展の開催後、浦安に招待された名古屋の漁具の旧蔵者の「間にあわなかったな」という悲痛なつぶやきである。残念ながら、名古屋の側では漁師町の歴史を伝える意識が広がらないまま漁師を経験した世代がいなくなってしまうことに対する痛切な思いであった。博物館の不在は、世代を超えて記憶と遺物が引き継がれてゆくべき方が途が絶たれることを意味するのである。

#### 4. 博物館の使命2 ～地域社会における自主的学習（生涯学習）の場

博物館は教育の機会でありそれは博物館資料を活用した学習活動によって実現する。博物館資料を学習に活用するためには、「地域に密着した地域の解明と歴史記述を目的とする」研究が必要である（熊野）。そして、それが学習として実現するためには「調査研究は大学や研究室だけの特権ではなく、「地域の歴史は地域の人々の手で明らかにすべき」という考え方が重要である（熊野）。これは市川市史編纂の際の反省、「誰のための市史か？」という問いから来ている。

博物館における生涯学習活動の実践例は各回シンポジウムの中でさかんに報告された。

「学習支援」「レファレンス対応」からは「市民の関心」が感ぜられ（尾崎）、葛飾区郷土と天文の博物館の考古学ボランティア活動の例では発掘調査、遺物整理、報告書作成、発掘説明会、発掘の成果展・展示解説までの実践（熊野）、足立区の事例では自主的活動をおこなう博物館登録グループ（ボランティア、史談会など）と連携した調査活動が報告されているが、出色なのは常設展示の改修に関連して地元の職人が間屋建築の考証をしたり、農家模型制作への協力などの市民参画である。他にも武田報告では古文書研究会の登録者が150名あり、テキストに漢詩・書状・書幅を取り上げ、翻刻資料集の刊行へつながったこと、尾崎報告でも市民学芸員や学習サークル（古文書）育成が報告された。

野尻報告（荒川区）では企画展「杉田玄白と小塚原仕置場」を通した人権学習による地域・学校とのつながりが報告された。再開発による地域の劇的な変化と新住民の増加という状況に対し地域の問題についての理解・普及が追いついていないという指摘があった。一方、地域のことを知りたいからこそ自分の関心として生涯学習活動に参加するのは新住民が多いという指摘（菱山・福生市）もあった。住民の入れ替わりの激しい福生市においては、講座参加者と地域の歴史・文化財・文

化遺産との接点が少ない。そこで、市民の人材育成として史跡ガイド養成講座などがおこなわれたが、史跡の観光地化という思惑もあるという。尾崎報告でも地域のエコツーリズムによる里地里山の身近な自然や文化の活用、漬物づくりや谷田ツアーを市民学芸員がガイドする事例が示された。

こうした歴史学習を通じた市民意識の変化について、浦安市では博物館建設可否の議論を経て旧住民の「郷土」に対する思いの覚醒があったという。同館の市民ボランティア「もやいの会」は当初の応募者が206名、最初は生活体験の出前授業から始まった。そして、開館から4～5年で新住民にも意識変化が見られ、定年退職した後、地域に自分の居場所を見つけられるようになったという。歴史学習を通じた新旧住民の交歓が実現し、新たなコミュニティが形成され地域社会復興への足がかりとなった。地域活性化という自治体が課題として掲げる問題の処方箋は、博物館にあるわけで、一部の趣味の人たちを満足させるだけの施設とは次元の違う活用方法があることを示している。この、生涯学習振興は「文化財保護思想の普及」にもつながるものである(熊野)。日本博物館協会が提唱する「対話と連携」は地域博物館を舞台に学芸員がその推進役となって着々と進行しているのである。

## 5. 学芸員論

各シンポジウムでは学芸員はどうあるべきかという問題にも触れられた。学芸員という専門職に関する正当な位置付けと評価に関する議論は今に始まったものではないが、依然、専門職としての学芸員が認知されているとは言いがたい状況がある。「学芸員側が主体的に行動し行政の中での認知度を向上させること」、「博物館運営に関するノウハウを身につける必要」が指摘された(野口)。野尻報告では「文化関係の業務が集まってくることによって学芸員が認知される」こと、調査研究を認めて

もらえないという声に対しては、それを公務として認めさせる説得力のあるプレゼンテーションが必要であり、事務方・学芸員の対立はお互いの仕事を知らないことが原因であるとする。学芸員は統括者であるべきで、学芸員の研究とは自分の研究ではなく地域に還元するという意識が必要と述べられた(野尻)。

一方、博物館が地域との信頼関係を構築する上で、学芸員が重要な役回りを果たしていることも指摘された。企画展「江戸のあそび～千社札～」の準備過程においては、神田地域の地域情報(人)集積のためのネットワークづくりが、聞き取り調査による信頼関係の構築、その次の段階として実現する新資料・新情報の獲得につながっていったという事例が報告された(滝口)。多田報告においても、自主的活動をおこなう博物館登録グループとの関係性構築が大きな比重となってきたことが指摘されている。

世田谷区の特別展「漢詩人岡本黄石の生涯」の一連の事業は1999年から2008年までの足かけ10年間にわたるもので、長期的な視野にたった事業の必要が指摘された(武田)。少ないスタッフでの業務遂行は、「狭い市域」だけを対象としているから成り立っているわけだが、歴史研究としては本来もっと広い枠組みで地域を捉える必要があるという指摘もあった(菱山)。地域との信頼関係の構築をはじめ、本来、博物館活動とは長期的展望の下に事業遂行のできる人員体制があつてはじめて有効に機能するはずだが、どこの館も事業拡張の可能性がありながら少ない人員体制がそれを妨げている、という認識が持たれている。そうした人手の足りない中、1990年代末から議論され始めた「+α」の機能一すなわち、英米で言うところのEducatorやLibrarianが専門的業務として遂行するような業務一が求められるようになった。それを実現するには、果たして学芸員に新たな役務を背負わせることで解決が図れるだろうか。「+α」の業務に

についての専門的職務としての敬意を欠如した、「貧すれば鈍する」というにふさわしい状況と言わざるを得ない。

## 6. 展示論 ～歴史研究一般との違い

展覧会企画についても言及がなされた。渡辺報告（練馬区）では、特に実物資料の存在が強調された。「郷土に関わる「実物」資料に基づき地域像を構築し、提示すること」が地域博物館の展示であり、「研究論文の歴史叙述の再現ではない」とする。また、渡辺は、特別展「鉄道の開通と沿線の風景」と特別展「ちょっと昔の道具たち」展示活動を回顧し、博物館の基本的機能（収集、保存、調査研究、展示・教育）は相互に関連するもので、そのどれかがしっかりしていないと展示の質は低くなる。集客重視によって、利用者の目に直接触れる部分ばかりがクローズアップされ、それを成り立たせている他の要素が軽視されているのではないかと問う。今後の課題として各報告で言及された市民との協働も大切であるが、この基本的機能の相互連関が失われないようにすることが重要と指摘された。

他にも展覧会企画について館蔵史料の積極的活用が主張された。「館蔵品は寄託品及び寄贈品である」、それは「調査研究の上活用しなければならぬ」という指摘がなされた（武田）。世田谷における岡本黄石関連の漢詩はまさにそうした試みであった。外部講師を呼んでスキルアップを図るなど、新たなチャレンジだった。千代田区の特別展「神田伸銅物語—紀伊国屋三谷家とその時代—」もまた、既存の収蔵資料 700 点の分析から始まった。関連資料の調査・聞き取りを充分におこない、三谷家からの聞き取りをきっかけに資料の借用を実現している（滝口）。

## 7. 学校連携

かつての学校教育カリキュラムへの「総合的な学習の時間」導入を契機に盛んになった

博学連携の問題はどうであろうか。昔の暮らしをテーマとした民具体験、小中学生の夏休自由研究成果展などの実践例は報告されたが（尾崎）、一連のシンポジウムの中ではあまりこのテーマについては言及がなかった（他で多く議論されているのでテーマとして避けた感もあるが）。教育機関である博物館にとって、学校教育と対置する教育機会としてのアピールはもっと必要ではないかと思うが、むしろ問題は博物館の積極活用を志向しない学校教育サイドにあるのかも知れない。あるいは、学校及びそれ以外の教育を合わせた教育全般を見渡す立場にある統括者の機能不全のためなのかもしれない。学校連携は博物館にとって重要な課題であるが、現場の努力だけではこれ以上の進捗がなかなか期待できない状況なのかもしれない。

## 8. 社会的存在としての地域博物館

博物館の有用性を冒頭に述べたが、単なる歴史学習に留まらず、博物館がさまざまな社会的課題にリンクする存在であることが報告の中から感じられた。

ひとつは、地域の活性化、地域アイデンティティの確立に資するという点である。飯能市の事例では、「森林文化都市宣言」はしてみたものの、所管部署ではなかなか「森林文化」を定義できなかった。結局、郷土館でそれを規定することになった。博物館は、新たな役割として地域活性化を担い、まちの魅力再発見を促進することができる。新住民はこれに関心があるという。そしてこれらを「行政の中でアピールする必要」があり、「統計による行政へのアピール」が述べられた。生活への関わりや社会貢献が目に見えることが大切だという（尾崎）。浦安市の特別展「「おらんハマ」を再び！」もまた、「町づくり」アイデンティティの模索であり、「海辺」「水辺」がテーマとなった（林）。基地の町福生市では住民の転入・転出が激しく住民の地域に対する思

い入れが少ないことが指摘されたが（菱山）、地域への理解促進に博物館が有効なのは言うまでもないだろう。

最後は、冒頭に掲げた演題の中で唯一我々に対する遺言となってしまった後藤和民の言葉でしめたい。後藤は博物館の社会的意義についてさらなる枠組みを志向した。「環境保全、燃料供給、教育環境」これらは「人間が知的動物として生きてゆくために必要な条件」であり、「地域問題として自然災害、公害、交通、福祉、平和、そして文化財の保護」を挙げる。博物館はその何れにも関わる存在なのだという。繰り返しになるが、「過去があって現在があり、未来がある」。「意味もなく現在の状況があるわけではない」。なぜこのような現状があるのか？ また、先人たちはその時々の問題にどう処置してきたのか？ それを知ることのみ、それだけが我々に許された未来に向けて何をすべきか考えるための材料なのである。その材料を活用するための装置として博物館は軽視されるべきではない。